

Title	『源氏物語』第一部の構造 : <もののさとし>の機能をめぐって
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	詞林. 1998, 23, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67411">https://doi.org/10.18910/67411</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『源氏物語』第一部の構造

—へものさとしの機能をめぐって—

藤井 由紀子

はじめに

『源氏物語』の長い作中年月の中で、へものさとし<sup>1</sup>はたった二回しか起こらない。須磨・明石巻と、薄雲巻と。

従来、この二つのへものさとしは並べて論じられることはあっても、一方の読みを補完するためにもう一方が利用されたにすぎないことが多く、統一的な把握はなされてこなかった。殊に、須磨・明石巻では、光源氏の側に起こった暴風雨に重きを置きすぎるばかりに、朱雀朝に対するへものさとしは見過ごされがちであった。

較べられなければならぬのは、朱雀・冷泉兩朝廷に対して起こったへものさとしだ。そして、この二つのへものさとしが『源氏物語』の中で果たす機能を考えていかなければならない。

一、へものさとしの機能

まず、それぞれのへものさとしが、どのように物語に描かれているのかを見ていこう。最初のへものさとしは、須磨の地で起こる暴風雨が発端となる。

弥生の朔日に出て来たる巳の日、(中略)海の面うらうらとなぎわたりて、行く方もしらぬに、来し方行く先思しつづけられて、

遷民八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれと  
なれば

とのたまふに、にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。

(須磨二〇九頁)

源氏の歌に呼応して起こる天変は、その後「雨風やまず、雷鳴り静まらずで、日ごろになりぬ」(明石二二三頁)と、雷雨となつて数日間おさまらなかつたことが記される。ここで注意せねばならないのは、これら須磨で起こる天変は一切へものさとしとは呼ばれないことだ。須磨の暴風雨はへもの

さとし〜ではない。では、何を以てへものさとし〜とすればよいのか。

京にも、この雨風、いとあやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。

(明石二一四頁)

須磨で始まった暴風雨は、都にまで及び被害著しいことが語られる。そして、その都の暴風雨こそがへものさとし〜なのだ。へものさとし〜は朝廷に対して起こる。須磨の暴風雨は、朱雀朝に対するへものさとし〜の裏面にすぎない。次に起こる薄雲巻のへものさとし〜と比較するためには、朱雀朝で何が起こったのかをこそ見ていかなければならない。

・その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきこと多かり。(中略)太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齡なれど、次々におのづから騒がしき事あるに、大宮もそこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内裏に思し嘆くことさまさまなり。

(明石二四二頁)

・去年より、后も御物の怪悩みたまひ、さまざまの物のさとししきり、騒がしきを、いみじき御つつしみどもをしまふしるしにや、よろしうおはしましける御目の悩みさへこのごろ重くならせたまひて、

(明石二五一頁)

以上が明石巻でのへものさとし〜の全用例であるが、その

結果として起こったこととして①太政大臣(元右大臣)の死②弘徽殿太后の病気が挙げられよう。朱雀帝の眼病は、夢枕に立った故桐壺院に睨まれたためのものであるからひとまず除くにせよ、その後彼が讓位する際に、その理由を「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、わが世残り少なき心地するになむ」(薄雲二七〇頁)と語ることから、③朱雀帝の退位を付け加えても問題なからう。

それでは、対する薄雲巻では何が起こっているのか。

その年、おほかた世の中騒がしくて、公さまにもものさとししげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろくこと多くて、

(薄雲四三三頁)

薄雲巻での天変は空に現われる。そして、明石巻と同じく人事にも影響は及ぶ。

・そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。(薄雲四三三頁)

・入道後の宮、春のはじめより悩みわたらせたまひて、三月には、いと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。

(薄雲四三三頁)

燈火などの消え入るやうにてはたまひぬれば、

(薄雲四三七頁)

・その日式部卿の親王亡せたまひぬるよし奏するに、

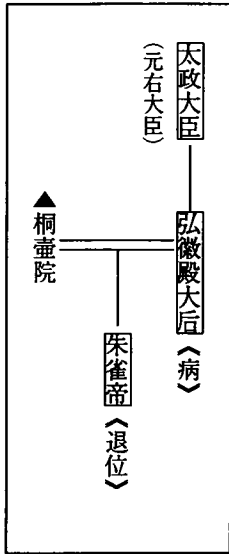
(薄雲四四三頁)

冷泉朝に対するへものさとし〜が、その結果として引き起

こしたことは、①太政大臣（元左大臣）の死 ②藤壺宮の死 ③式部卿親王の死である。

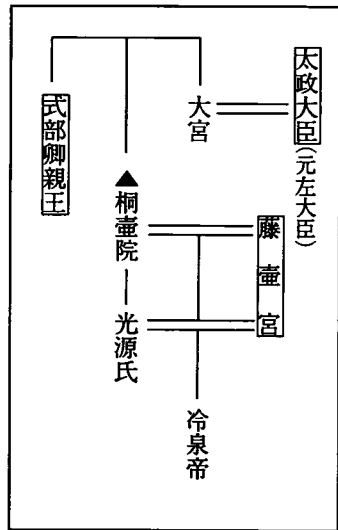
太政大臣と帝の母后が、共に物語の表舞台から退場するという点において、二つの「へものさとし」は酷似している。が、その一方で、朱雀帝と冷泉帝の運命には大きな隔たりがあり、それこそが従来の最大の論点であった。何故朱雀帝は退位にまで追い込まれるのに対し、冷泉帝には実質的な咎めが何もないのか。罪の子冷泉帝のその罪は解消したのか。そもそも「へものさとし」とは何なのか。これらすべてを解決するためには「罪」という問題に捉われるのではなく、もう一度「へものさとし」で何が起こったかを詳細に検討していかねばならない。

まず、明石巻の「へものさとし」。



系図の上で確認すれば、明らかに旧右大臣勢力が「へものさとし」によって排除されていることがわかるだろう。

薄雲巻の「へものさとし」ではどうか。



死去した人物を並べてみる。すると、いずれも桐壺院に近い人々であるということに気付く。太政大臣は桐壺院の妹大宮を妻に持ち、その治世を支えた第一の臣下であるし、式部卿親王は弟、藤壺は妻である。いわば、桐壺帝の全盛期を支えた中心人物が揃ってこの「へものさとし」によって退場させられているのであり、これは桐壺帝勢力の排除、と言えらるであろう。思えば、薄雲巻に至って、冷泉帝は初めて自身の出生の秘密を知るのであった。それは桐壺帝の系譜から外れることであった。冷泉帝は排除されるべき系譜に連なっていない。それこそが薄雲巻の「へものさとし」の論理であり、夜居の僧都の密奏もその上でこそ意味を持つのだ。

二つの「へものさとし」は「ある一定勢力の排除」という

機能を帯びている。では、何故その排除がなされなければならなかったのか。それは今まで、光源氏の栄華の為、と、ひとまずは考えられてきた。明石巻では源氏の帰京の為、薄雲巻では源氏の潜在王権の為、と。しかし、二つのへものさとしを繋ぐある人物に注目したとき、物語は新たな様相を呈し始める。

## 二、浮かび上がる秋好中宮

明石巻のへものさとしの後、薄標巻で「まことや」という言葉をして語り出される一人の人物がいる。六条御息所である。

まことや、かの齋宮もかはりたまひにしかば、御息所上りたまひて後、(中略)かの六条の古宮をいとよく修理しつくりたりければ、みやびやかにて住みたまひけり。

(薄標二九九頁)

「まことや」についてはすでに諸氏により検討がなされており、詳細な定義はそちらに譲るにせよ、非常に唐突な話題転換がなされた印象を我々に与える言葉であることに間違いはなからう。ここでも、六条御息所は伊勢下向以来、久しぶりに物語の表舞台に引きずり出されたわけであり、そして引きずり出されるやいなや、病氣となり死んでしまう。彼女が残したものは源氏への遺言と、その娘後の秋好中宮であった。

源氏は「心細くてとまりたまはむを、必ず事にふれて数まへきこえたまへ」かけてさやうの世づいたる筋に思し寄るな」(薄標三〇一頁)という御息所の遺言に従って、薄標巻末に至って秋好中宮の冷泉帝への入内計画を持ち上げるのであった。

一方、薄雲巻のへものさとしの後。密通の事実を冷泉帝が知ったのでは、と恐懼した源氏が、王命婦を訪ねたその直後。

齋宮の女御は、思ししも著き御後見にて、やむごとなき御おほえなり。御用意、ありさまなども、思ふさまにあらまほしう見えたまへれば、かたじけなきものにもてかしづききこえたまへり。

(薄雲四四八頁)

ここで唐突に語り出されているのは、誰であろう、初めのへものさとしの後同様、秋好中宮その人であることに注目しなければなるまい。

二つのへものさとしの後、いづれも唐突に浮かび上がってくる秋好中宮。しかし、「唐突」に思えるのは、我々が源氏の側に寄り添って物語を読み進めているからにすぎない。

薄標巻で彼女が物語の表層に浮かび上がってくるのは齋宮の交替があったからである。何故齋宮が替わったのか。それはまさにへものさとしによって朱雀帝が排除されたからである。朱雀帝から冷泉帝への御世替わり。そのことが彼女

を物語の舞台である都へと召喚したのである。

また、薄雲巻。もともと「大人しき御後見」(薄標三二頁)として入内した彼女である。冷泉帝の母であり最大の庇護者であった藤壺の死去によって、「思しきも著き御後見」としてのその役割がクローズアップされるのは、当然の成り行きであろう。そして、藤壺の死もまた、へものさとしによって招かれたものであることをおさえておかなければならない。

つまり、秋好中宮は、へものさとしの排除の結果、必然的に浮かび上がってくる人物として設定されているのである。それは、源氏の「潜在王権」などという曖昧な栄華と異なり、明確に物語の上に存在している事実だ。秋好中宮こそがへものさとしを通して、着実にその栄華を実現している。それを見越してはいけない。

### 三、六条一族と明石一族

薄標巻には、実はもう一つ、「まことや」によって語り出される挿話がある。明石姫君護生の物語である。

まことや、かの明石に心苦しげなりしことはいかに、と思し忘るる時なれば、(中略)三月朔日のほど、このころやと思しやるに、人知れずあはれにて、御使ありけり。とく帰り参りて、使「十六日になむ。女にてたひらかに

ものしたまふ」と告げきこゆ。

(薄標二七五頁)

阿部好臣氏は「まことや」で語り出される挿話を「光源氏の日常を正の世界(物語の主流となる軸)とすると、反世界(異質な軸)とでも呼べそうな世界」と位置付けられた。思えば、源氏の明石行きは、へものさとしの裏面としてあった。都で相次ぐ凶事の裏で、生をうけたのがこの明石姫君であり、彼女はいわば「反世界」の住人なのだ。そしてその「反世界」こそが、実はへものさとしによって浮かび上がってくる世界であり、明石姫君と秋好中宮はその中に対として存在していると言えよう。

先に挙げた薄雲巻での秋好中宮の登場の場面。その後彼女は源氏と対面するのだが、そこで源氏は次のような依頼をする。

数ならぬ幼き人のはべる、生ひ先いと待ち遠なりや。かたじけなくとも、なほこの門ひろげさせたまひて、はべらずなりなむ後にも数まへさせたまへ。(薄雲四五頁)

つまり、源氏は秋好中宮に、明石姫君の後見を頼んだわけであり、ここで二人の女君は分かちがたく結びつくこととなる。

従来、六条一族と明石一族には、何らかの血縁的繋がりがあつたのではないかと指摘されてきた。もちろん、物語の上で決定的な根拠を見出すことはできない。しかし、血縁関係までは確定できなくとも、彼らが密接に繋がりがあつてい

とは確かだ。その数ある証拠の中で、特に今までとりたてて注目されなかった箇所を挙げてみたい。

内裏の帝御位に即かせたまひて十八年にならせたまひぬ。

(中略) 日ごろいと重く悩ませたまふことありて、にはかにおりぬさせたまひぬ。(中略) 六条の女御の御腹の一の宮、坊にぬたまひぬ。さるべきこととかねて思ひしかど、さしあたりてはなほめでたく、目おどろかるるわざなりけり。

(若菜下一五七頁)

明石姫君は、六条女御である。その呼称は一度しか用いられないが、だからこそその使用された箇所に注目したいのだ。冷泉帝の退位と、今上帝の即位。それに伴って、明石姫君腹の一宮が東宮に決まる場面である。それは、明石姫君がやがて国母となることを示しており、まさに明石一族の悲願達成の場面であるのだが、何故ここで彼女は「六条の女御」と呼ばなければならないのか。それは「六条院は完全に明石一族のものになってしまったことを示す」ためであることに間違いないのだろう。しかし、その呼称が我々にもっと直接的に呼び起こすのは、六条御息所の存在ではなからうか。明石姫君が帝の女御になるということは、秋好中宮がその座を譲り渡すことに繋がっていく。子をなすことなく宮中を去っていく秋好中宮。それは六条一族の敗北であろうか。いや、そうではあるまい。その遺志は、秋好中宮から明石姫君に受け継がれた。だからこそ、彼女はたった一度だけの呼

称で呼ばれるのだ、「六条の女御」と。その呼称は六条御息所こそが呼ばれるはずであった呼称なのだから。

へもの(のさとし)によって浮かび上がる「反世界」の中で二人の女君は重なり合って一族の遺志を実現していく。排除される人々と、浮かび上がる人々と。へもの(のさとし)によって正反対の運命を歩むことになる両者には、しかし、一つの接点を見出だすことができるのである。

#### 四、へもの(のさとし)と桐壺更衣

須磨巻において、明石入道は、まだ見ぬ源氏に我が娘を嫁がせようと計画し、その根拠として、自身と源氏との血縁関係を挙げる。

故母御息所は、おのがをちにものしたまひし按察大納言のむすめなり。(須磨二〇三頁)

桐壺一族と明石一族には確かな血縁関係がある。阿部好臣氏は夙に両者の関係に注目され、「桐壺一族の意志は、藤壺物語には欠落してしまう部分を、明石物語に継承させんとしている」と言われた。また日向一雅氏は「二つの「家」の遺志はほとんど相似形であった」と説かれている。ここに六条一族を加えても、何の問題もなからう。共に物語の始発においては没落しており、女系によって家の復興をなそうとする。いわば、秋好中宮と明石姫君は、桐壺更衣の系譜に位置

付けられる女君なのだ。明石入道の発言の続きを引こう。

いと警策なる名をとりて、宮仕に出だしたまへりしに、  
国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほど  
に、人のそねみ重くて亡せたまひにし<sup>かど</sup>、この君のと  
まりたまへる、いとめでたしかし。  
(須磨二〇三頁)

ここでは、この発言が、ただその血縁関係を述べるにとどまらず、桐壺巻における更衣の悲劇にも触れる内容になっていることに注目したい。そしてこのすぐ後に最初のへものさとしの発端となる、須磨の浜辺での暴風雨が起こっているのである。

また薄雲巻でも、ここでは明石尼君の発言の中に、桐壺更衣にふれる箇所がある。

母方からこそ、帝の御子もきはぎはにおはすめれ。この  
大臣の君の、世に二つなき御ありさまながら世に仕へた  
まふは、故大納言の、いま一階なり劣りたまひて、更衣  
腹と言はれたまひし<sup>けぢめ</sup>にこそはおはすめれ。

(薄雲四一九頁)

実の娘を紫上に託す決心のつかない明石上を説得する尼君の言葉は、やはり身分の低い桐壺更衣の悲劇を暗示させる内容となっていて、しかも、須磨巻同様、この直後にへものさとし<sup>し</sup>が起こっているのである。物語の上に桐壺更衣がその影を落とすと、必ずへものさとし<sup>し</sup>が起こる。これを単なる偶然として片付けてよいのであろうか。

「源氏物語」において、死人の噂話をするのが、その魂を現世に呼び出すきっかけになることは、いわば物語の論理のように存在している。例えば藤壺が、例えば六条御息所がそうだった。ここでへものさとし<sup>し</sup>を桐壺更衣が引き起こしている、などというつもりは毛頭ない。しかし、ここに、桐壺更衣の、いや桐壺一族の遺志の発露とでもいうべきものを見出だすことは可能であろう。

藤井貞和氏は「源氏物語」の第一部がそもそも桐壺更衣一家の「遺言」実現の物語になっている」と説かれた。「遺言」とは源氏を帝位に即かせることであり、そしてその実行者として、藤井氏は桐壺帝を設定された。しかし桐壺帝が関知し得るのは少なくとも最初のへものさとし<sup>し</sup>までではないか。

確かに、桐壺帝の遺言は源氏の生き方を強く規定するものではあった。しかしそれすらも桐壺更衣の意図したのとは、逆の方向に作用しているのだ。例えば薄雲巻。冷泉帝から讓位を仄めかされた源氏は次のような理由でその意見を退ける。

故院の御心ざし、あまたの皇子たちの御中に、とりわきて思しめしながら、位を譲らせたまはむことを思しめし寄らずなりにけり。何か、その御心あらためて、及ばぬ際には上りはべらむ。ただ、もとの御掟のままに、朝廷に仕うまつりて、

(薄雲四四六頁)



桐壺帝の存在は、源氏を皇位から遠ざける。そもそも物語の始発において、更衣の死後、一人残された母君が「慰む方なく思ししづみて」(桐壺一四頁) ついに亡くなってしまうのは、源氏が東宮になれなかつたからであり、そしてその決定を下したのは他でもない桐壺帝その人だったことを思い出さなければならぬ。桐壺一族の断絶の引き金を引いたその人を、その家の遺志を引き継ぐ人間として設定できようか。

我々は相思相愛の一对の男女として、桐壺帝と桐壺更衣の關係を感傷的に捉えずぎている。村井利彦氏は、桐壺巻前史とでもいふべきものを想定して、桐壺一族をその時敗北を喫した側と捉える。そして「若い桐壺帝は、藤原氏の新勢力に乗つて帝となつたに相違ない。が、一掃した旧勢力に対して忸怩たる思いがある。菅原道真事件後の醍醐天皇のように。忸怩たる思いが、敗残の人・更衣への偏愛となつた」と説かれた。桐壺帝と桐壺更衣は、対立する立場にあつた。だからこそ、桐壺帝の偏愛は周囲を巻き込み政治的大問題となり、悲劇の結果を招かざるをえなかつた、と考えるのは自然だ。

敗北者は、桐壺一族・明石一族・六条一族。勝利者は、桐壺帝・左大臣一族・右大臣一族。そう思つて、へものさとし<sup>し</sup>によつて排除された人々を見ると、それはまさに、桐壺巻時点で勢力を持っていた人々であり、更衣を排除したその人々であることに気付かされるのである。物語は桐壺帝などという媒介者を置くことなく、もつと直接的に、桐壺更衣

の遺志をへものさとし<sup>し</sup>に投影させているのだ。

そして、へものさとし<sup>し</sup>の後に浮かび上がる二人の女君は、桐壺更衣一族と繋がり、共に中宮となり、桐壺更衣の遺志を実現する人物である。それは、男であり臣下である光源氏よりも、より直接的に桐壺更衣と重なつていく。物語は、光源氏の栄華を志向するように見せながら、その一方で、桐壺更衣から脈々と流れる女君の栄華の物語を描き続けているのである。

更衣はその最期に歌を詠む。

かざりとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり  
(桐壺九九頁)

と。「生きたい」と願つた女の遺志は物語を貫いている。彼女は六条御息所のような物の怪にはならなかつた。ならなかつたけれども、しかし、物の怪よりももつと強大な力となつて、物語を底から動かし続けているのだ。へものさとし<sup>し</sup>はその発露としてある。

おわりに

以上、へものさとし<sup>し</sup>の機能を明らかにすることによつて、そこに見出させる桐壺更衣の遺志、そしてそれを受け継ぐ女君の系譜を辿つてきた。それを桐壺前史へと繋げていくことは容易いが、これ以上の深読みはやめておこう。

桐壺帝・高麗の相人の予言を生きるのが光源氏だとすれば、桐壺更衣の遺志を生きるのが秋好中宮と明石姫君だ。この二つの流れを物語は内に含んでいて、前者が表、後者が裏というのが第一部の構造だ。しかし第二部でこの関係は逆転する。そもそも、前者の栄華は「相人の言空しからず」と書かれる濔標巻で一旦終わるのではないか。桐壺院の法華八講は、彼の役割に終止符を打つべく、その魂を物語の彼方へ封じ込めてしまった。藤裏葉巻の栄華は、後者の栄華だ。定説に惑うことなく、今、新たに第一部を捉え直さねばならないだろう。

（へものさとし）はその新たな地平を切り開いているのだ。

## 註

(1) へものさとし及びそれに伴う天変地異に関する論稿は数多いが、今回特に参照したものを以下に挙げておく。

- 須磨・明石巻の天変に関しては、
- 柳井滋「源氏物語と豊駿譚の交渉」（『源氏物語研究と資料—古代文学論叢第一輯—』武蔵野書院S 44）
- 林田孝和「源氏物語の天変の構造」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社H 5）
- 薄雲巻の天変に関しては、
- 斎藤暁子「薄雲巻における冷泉帝の罪をめぐって」（『源氏物語と

和歌研究と資料Ⅱ—古代文学論叢第八輯—』武蔵野書院S 57）

浅尾広良「薄雲巻の天変—「ものさとし」終息の論理—」（『大谷女子大国文』H 8・3）

(2) 阿部好臣「二つの「まことや」（『中古文学』S 49・10）

小林美和子「複線型叙述の物語構造に於る効果」（『国語と国文学』S 50・12）

田中仁「まことや—光源氏と語り手と—」（『国語国文』S 56・3）など。

殊に六条御息所との関わりを論じたものとして、

吉海直人「六条御息所と「まことや」（『論集中古文学5 源氏物語の人物と構造』笠間書院S 57）

(3) 註2 阿部論文

(4) 坂本和子「光源氏の系譜」（『国学院雑誌』S 50・12）

坂本共展「五つの大臣家と明石入道」（『源氏物語構成論』笠間書院H 7）など。

(5) 山田利博「源氏物語正編の骨格—明石一族を視座として—」（『国文学研究』H 4・6）

(6) 阿部好臣「明石物語の位置—桐壺との関わりにおいて—」（『語文』S 51・7）

(7) 日向一雅「光源氏論への一視点—「家」の遺志と王権と—」（『源氏物語の主題—「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社S 58）

(8) 藤井貞和「神話の論理と物語の論理」（『源氏物語の始原と現在—定本—』冬樹社S 55）

(9) 村井利彦「桐壺の夢」（『源氏物語の探究第十輯』風間書房S 60）

(10) 桐壺巻での相人の予言が藤裏葉巻で実現するという定説に対し、濔標巻で実現することを最も詳細に論じたものとして、

藤井貞和「『宿世遠かりけり』考」〔論集中古文学Ⅰ源氏物語の表  
現と構造〕笠間書院 S 54  
が挙げられる。

※引用は日本古典文学全集『源氏物語』一〜六（小学館）によった。

（ふじい・ゆきこ） 本学大学院博士前期課程